

「違い」への向き合い方

弘前市立第五中学校

八木 利 彩

私は中学校生活がとても充実している。喧嘩けんかしても言い合いが言い合える友達、何でもないことで一緒に大笑いする友達、いつまでも話をきいてくれる友達。仲間が私の近くにいることができるのが、私の毎日が充実している一番大きい理由だと感じている。

表紙に描かれた高校生五人。どこにでもあるような教室。『かくしごと』と『』という不思議な本の題名。本を開くと、自分が経験したことがあるような場面が出てきた。言葉にできなかったその時の自分の感情と重ねていた。

この本の登場人物は、特別な能力を持っている。人の心の動きや感情を、数学や記号で知ることができる。そして、その能力を隠しながら生活している。その力のせいで、自分の振舞い方や相手の気持ち之余計に考えてしまう。自分に自信が無い僕、ヒロインよりもヒーローになりたいミッキー、不思議な言動をして周囲を和ませるバラ、明るくて運動が好きなツカ、大人しくて控えめなエル。全く共通点が無さそうな

「違い」を持った五人が向き合い、ぶつかり合い、認め合い、絆きずなを深め成長していく。

この本の中に「皆、何を知って色々な人を好きになるんだろう」という一文があった。私の友達はみんなそれぞれの個性を持っている。みんな一人一人違うけれど、全員大好きで大切な人だ。共通しているとすれば、「優しさ」を持っていることだと思っ。いつも笑顔で声をかけてくれる。どんなときでも隣にいてくれる。ありのままの私を認めてくれる存在だと思っている。

一方で、「違い」を理由に傷ついている人がいることも事実だ。

七月十二日、タレントのryuchellさんが自ら命を絶った。心と体の性が異なるトランスジェンダーであることを公表し活動していた。LGBTQへの理解がまだ十分ではない中、自分らしく生きる姿は、たくさんの勇氣や希望を与えていた。ryuchellさんが死を選んだ理由の一つと

して、誹謗中傷が考えられている。自分らしく人生の生き方を決めること、人生の選択をすることを、なぜ責められなければならないけなかったのか。その人らしさを認めることができない、あまりにも幼稚な考え方から生まれた言葉のナイフで、ryuchellさんは殺害されたのだと思った。

自分らしく生きるとは、自分の気持ちに正直に生きていくこと。他人の評価を気にすることなく、自分の楽しいと思う事や、やりたい事を自ら選択していく生き方という。それに多数派や少数派はない。正解も不正解もない。邪魔をする権利は誰にもない。

全ての人が自分らしく生きていくためにはどうしたらよいのか。

口ぐせのように「普通」と言う人に対して、私は違和感を持つている。「普通」とは、ごくありふれたものであることだ。この地球には八〇億を超える人が暮らしている。同時に八〇億を超える自分らしさが存在している。全ての人を、全ての自分らしさを知って言っているのか。何を知って「普通」という言葉を使っているのか。きっと、その人自身しか入れないようなせまい世界での「普通」なのだろう。「普通」に縛られず、自分の世界を広げていくべきだ。一人一人が考

え方を変えていくことが必要だと思う。

五人の主人公の「違い」はそれぞれの良さであり、自分を成長させる素晴らしいものだった。そう感じさせられるのは、五人が「違い」を受け入れていたからだ。「違い」はどう向き合うかで形が変化する。「違い」を知ろうとしなければ、人と人とを隔てる壁になる。否定すれば、人を傷つける凶器になる。そして、五人のように「違い」を受け入れれば、人と人とを結びつける糸になる。この糸が全ての人をつなぎ、誰もが自分らしく笑っていられる未来を紡いでいくことを願っている。

私は価値観が違う人であっても、「違い」を知って、相手らしさを認められる人になっていきたい。そして、その良さを自分に取り入れていきたい。もしも誰かが「違い」を理由に私の大切な人を傷つけたら、それは間違っていると抗議できる強さを持つ人になりたい。

「違い」は何のためにあるのだろうか。私は助け合うためだと思ふ。完璧な人なんていない。みんな足りない部分を持つている。それを補い合うために「違い」がある。個性が尊重され、認められる世界。私もその世界をつくる一員でありたい。